平成26年度　土木学会選奨土木遺産

新釧路川

国土交通省　北海道開発局
釧路開発建設部

概要

国土交通省

- 名称：新釧路川
- 竣工：大正10年（1921年）に着手、
  10年を経て昭和6年（1931年）に完成
- 施設の諸元
  ：延長　11.2km　川幅　約550m
- 所在：釧路市及び釧路町
- 釧路川は、屈斜路湖から弟子屈町及び標茶町の市街地を流下し、釧路湿原に入り岩保木地点において新釧路川となり、釧路市街地を流下し太平洋へ注ぐ一級河川です。

釧路の発展と課題

国土交通省

- 明治20年代以降の釧路は、水産業、林業、製紙工場、硫黄鉱山、炭田など鉱工業が発展し、釧路川の河口に本格的な港湾整備が急務であったが、釧路市街地の上流部で阿寒川が合流するなど河口部への土砂流入が課題であった。

釧路町市街全景（明治30年頃）

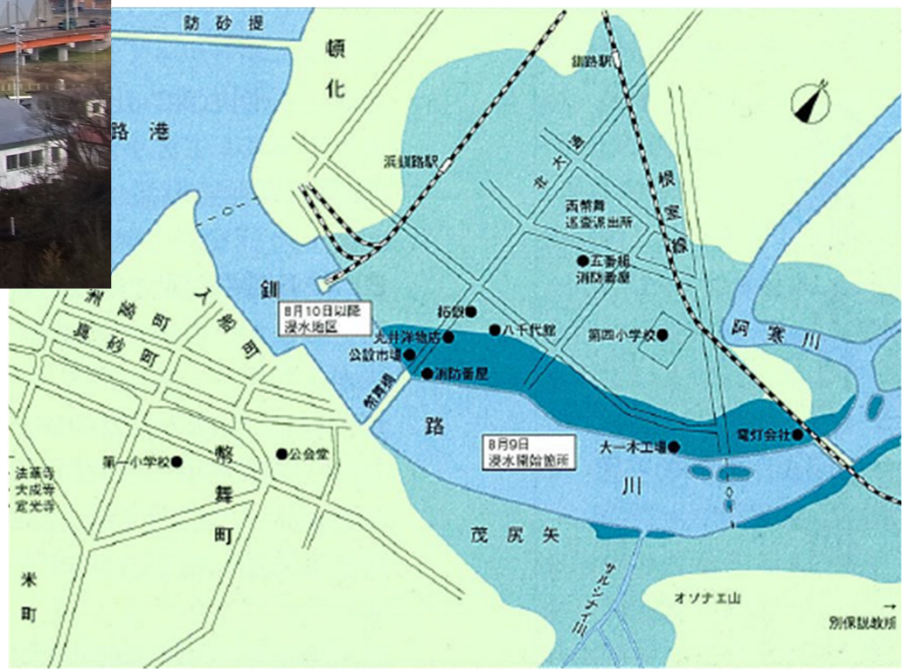
釧路川中流木材集積場

大正９年８月の大洪水

国土交通省

- 大正9年8月に釧路市街地のある湿原下流域171km^2（現在の釧路湿原180km^2）が浸水した。
- 2000戸以上の家屋の流出・浸水等の被害が発生した。

釧路市街地の浸水状況



釧路市街地の浸水状況図

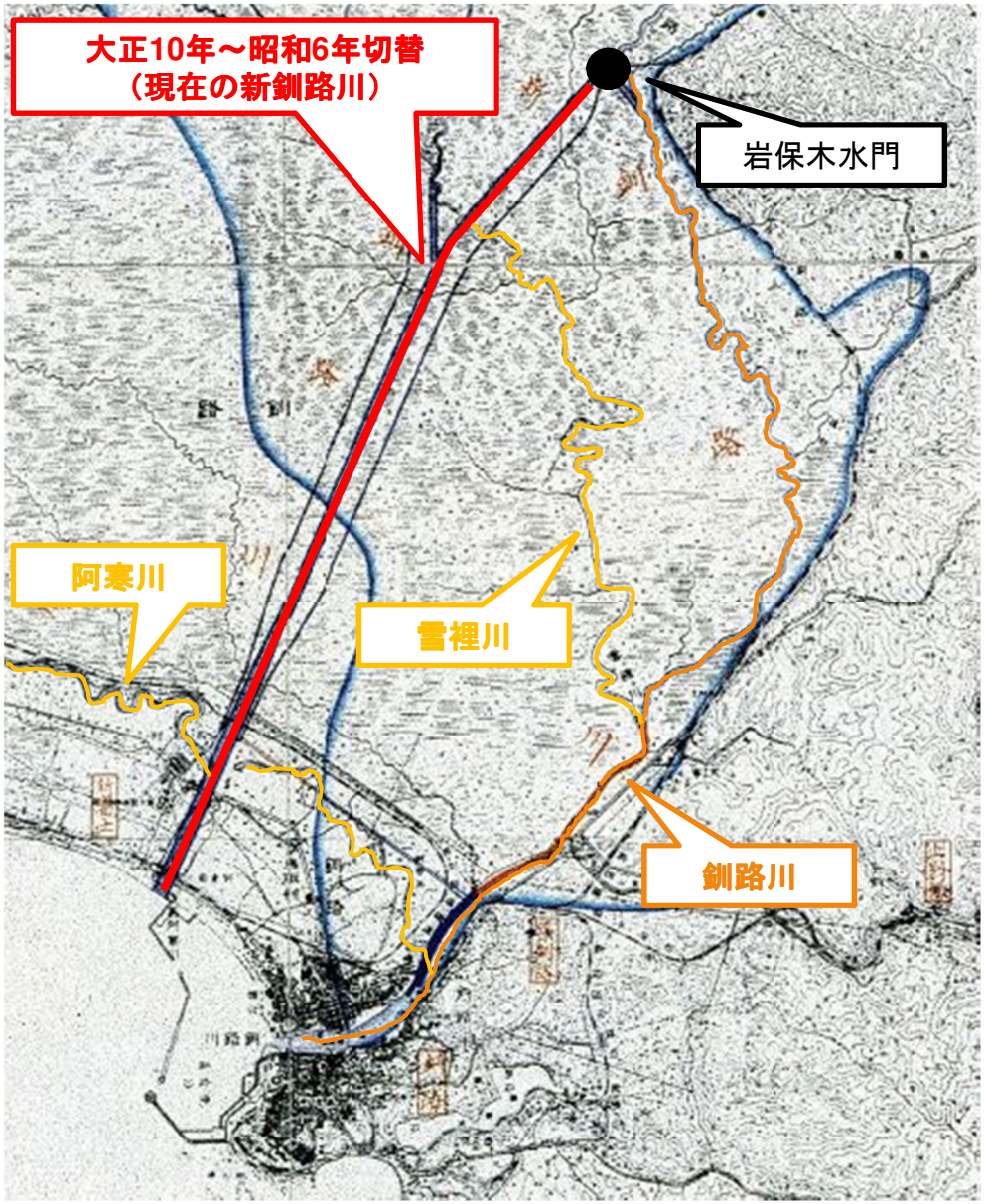
新水路の着手

国土交通省

- 大正9年に釧路市街地の大半が水没するほどの未曾有の洪水が発生

- 大正10年、釧路川の岩保木地点から11.2kmの新水路を掘削し、市街地を流れる釧路川を上流域から切り離す工事に着手

- 洪水対策と港湾の土砂対策の解決
- 新釧路川周辺の新たなまちづくり

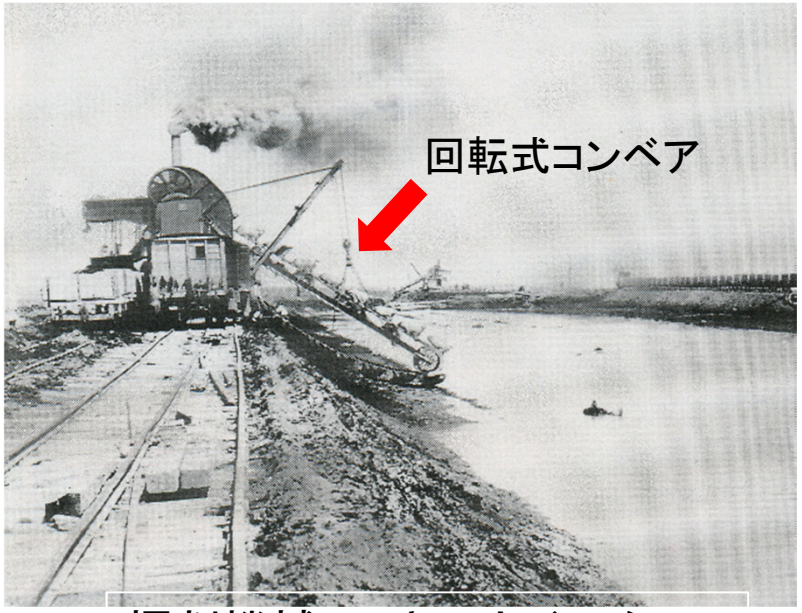


大正9年釧路川改修当初計画平面図

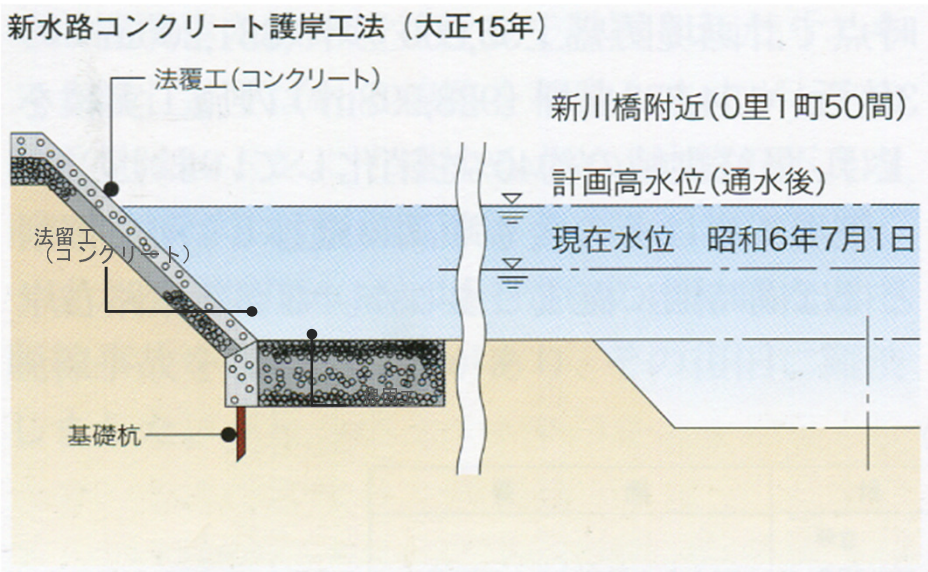
新水路の掘削と永久護岸の開発

国土交通省

- 当時最新鋭のシステムであったエキスカベーターを用い、泥炭湿地における掘削を行った。
- 治水事務所の技術陣は、永久護岸の原型として全国的にも先駆的なコンクリート護岸を開発した。
- この工法はその後、札幌市街地の豊平川や旭川市街地の石狩川上流の護岸にも採用された。



掘削機械　エキスカベーター



先駆的な護岸工法

現存する新釧路川の護岸

新釧路川完成後の洪水被害

国土交通省

- 大正9年8月洪水は既往最大の洪水であったが、釧路川流域ではその後も相次ぐ洪水被害が発生している。
- 戦後、中上流の弟子屈町や標茶町では洪水氾濫より多大な被害が発生しているが、新釧路川周辺の釧路市街地では浸水被害はほとんど発生していない。

標茶町の浸水状況

弟子屈町の浸水状況

昭和35年3月洪水の浸水状況

標茶町内の浸水状況

弟子屈町内の浸水状況

昭和54年10月洪水の浸水状況

高水敷利用

国土交通省

- 現在の新釧路川は、高水敷が運動場や公園に整備され、スポーツや散策、憩いの場として利用されているほか、夏祭りや花火大会などの各種イベントに利用されている。

高水敷でのお祭り

パークゴルフをする市民

花火大会

多様な生物環境と漁業資源

国土交通省

- 新釧路川周辺では、特別記念物であるタンチョウのほか、オオワシやオジロワシ、国内最大の淡水魚であるイトウなどの希少種が生息している。
- 新釧路川の河口から約15kmまでが、日本では北海道の太平洋沖沿岸のみに分布するシシャモの自然産卵場となっている。
- 河口から8.3km地点では、サケ・マスの捕獲を行う施設（ウライ）が設置されており、漁業資源の維持を図る上で大きな役割を果たしている。

特別天然記念物のタンチョウ

釧路産のシシャモ

ウライでのサケの捕獲

治水対策・港湾の発展・まちづくりに寄与

国土交通省

- 新釧路川の完成により、浸水被害がほとんど発生していないため、かつて釧路川周辺の市街地は新釧路川周辺まで広がり、日本製紙などの産業が発展している。
- 釧路川河口の重要港湾釧路港は、東港区が水産業の一大拠点として、また、西港区は東北海道の国際物流拠点として発展している。
- 新釧路川は、釧路湿原の遊水地と合わせて、洪水を安全に太平洋へ流下させ、市街地や港湾の発展を支えている地域の宝です。